平成３０年度第１回知床世界自然遺産地域科学委員会
適正利用・エコツーリズムワーキンググループ
議事録

日時：平成３０年９月２７日（木）１０：００～１２：００
場所：羅臼町公民館　２階 大集会室（ホール）

会　議　次　第

開会

あいさつ

議事

１．長期モニタリング計画の見直しについて
　（１）これまでの経過と科学委員会での判断
　（２）新しいモニタリングの考え方の導入

２．適正利用・エコツーリズム検討会議の今後のビジョンについて

３．その他

閉会

事務局　環境省　高辻
　おはようございます。
　平成 30 年度第 1 回知床世界自然遺産地域適正利用・エコツーリズムワーキンググループを開催する。
　環境省の釧路自然環境事務所の高辻と申します。よろしくお願い致します。

事務局　環境省　安田所長
　おはようございます。お忙しい中参画いただきお礼申し上げる。本日は会議が一日と長い時間となりますがよろしくお願いしたい。
　今回は、エコツーリズム検討会議とエコツーリズム WG を分けて開催することとした。長期モニタリングの新しい枠組みにおける評価について議論していただく。また、エコツーリ

ズム検討会議の今後の進め方について敷田座長より意見をいただいた。活発な議論をお願いしたい。

事務局　環境省　高辻

委員の出席状況を報告する。本日、石川委員と庄子委員が欠席となっている。

【配布資料確認】

これより敷田座長にお願いする。

敷田座長

おはようございます。

午後の会議も予定されているため一日のお付き合いになる。どうぞよろしくお願いします。

長時間に渡る議論で、午前のテーマの一部が午後のテーマとオーバーラップしている。皆さんには2回議論していただくような事にもなるが、それぞれ重要なテーマであり、午後からは関係者が増えるため了解いただきたい。

エコツーリズムWGの開催については、環境省を始めとする事務局の皆さんに努力していただいた。恐らく5年振りの開催となる。エコツーリズムWGは、知床エコツーリズム戦略策定の際には頻繁に開催したが、それ以降は開催していない。非公式ではWGに等しい打ち合わせはあったが、今回改めてエコツーリズムWGを開催することになった。

知床エコツーリズム戦略ができて数年が経過し、試行を含めて5年が経過した。これまで様々な提案が行われてきたが、今後も管理者とWGの専門家で情報を共有しながら進めていく必要があり、ここで一度振り返りが必要であるということで今回の開催に至っている。突然再開されたと感じておられる方もいると思うが極めて自然な成り行きだとお考えいただきたい。振り返りをする時期には5年という単位は適当な期間だったと考えている。

また、午後のエコツーリズム検討会議と午前のエコツーリズムWGの会議は性質が違う。午後はステークホルダー関係者が広く参加しており、地域関係者と専門家、管理者の3者が集まって議論をする場という設定で進められる。

午前中のエコツーリズムWGでは、我々専門家は科学委員会の一部という認識になる。科学委員会の一部という考え方を取れば、基本的にアドバイザリーボード、諮問を受けて回答する。専門的な見地からアドバイスするという立場になる。そして、管理者の方は管理についての決定をする立場に変わる。そのため、議論の仕方や内容が午前と午後とでは多少違ってくる。その点は5年間のブランクがあり不慣れなことから、私の発言に進行上の問題があればご指摘願いたい。皆さんも改めて認識していただくことをお願いしたい。

しかし、ここでの発言や議論が制約されることは無い。私達はより良い世界遺産地域の管理を目指すという事は共有しているため、その点について認識の上進めさせていただく。

本日の進行は会議次第議事の 1、2、3 に従い進める。

それぞれの資料は説明者がすでに用意している。説明をしていただいた上で進行する方式を取りたい。

1 番目の議事「長期モニタリング計画の見直しについて」を事務局から説明願う。

【議事１．長期モニタリング計画の見直しについて】

事務局　環境省　守

長期モニタリング計画の見直しについて説明（資料 1-1）

敷田座長

私と愛甲委員より提案部分の補足をする。最初に提案内容について愛甲委員より補足をお願いする。

愛甲委員

参考資料 4 にあるように、これまでの評価は利用者数データのみを膨大に把握していた。しかし、それだけでは利用が適正かどうかは判断できないと科学委員会からの指摘があった。そして、それについて上手く答えられないという状況であった。答えられるようにするには、知床エコツーリズム戦略に基づいた遺産地域内でツアーや利用が、適正といえる状況になっているのかを判断する必要がある。しかし、数だけでは判断できないため、知床エコツーリズム戦略に基づいた管理ができているか、知床エコツーリズム戦略にそって実施されているかを評価できれば良いのではないかと考えた。

また、自然環境に影響が出ているかを評価することは非常に難しく、他の WG と共同で検討しなければ判断できない部分がある。

参考資料 2（知床世界自然遺産地域長期モニタリング計画の別票.2「評価項目を評価するためのモニタリング項目」）にあるように、評価項目「Ⅶ レクリエーション利用等の人為的活動と自然環境保全が両立されていること。」に該当するものは、ケイマフリ、水鳥、エゾシカ、ヒグマ等がある。この部分はレクリエーション利用が自然環境にどの程度影響があったかをエコツーリズム WG だけでは判断できない。レクリエーション利用がどの程度あるかというデータは出せても、それによりどういう影響が出ているかは分からない。このように両方で評価しなければならない部分があり、その辺の改善も図らなければいけない。

敷田座長

私からは科学委員会の状況について若干追加したい。一点目、専門家として今回の提案をさせていただく背景には、モニタリングに対する科学委員会での議論があったからである。エコツーリズム WG の担当部分のモニタリング結果報告は、これまでは利用人数がほとんどであった。自然科学系のデータと比較すると明らかに精度や内容に違いがある。人数だけを

数えてモニタリングと言えるのかというような話も伝わってくる。こちらではそういうことは思ってはいないが説明が十分できない。実際、利用した影響、インパクトの量は人数よりも行動、個々の利用がどれだけのインパクトを与えているか×人数が本来のインパクト量であり、専門家としてクリアな説明ができないということがあった。

二点目、一生懸命人数、利用圧をカウントしていただいているが、そのデータは白書以外では有効に利用できていなかった。これは非常に勿体ない事である。

三点目、このエコツーリズム WG に関連することは、管理と深く関わりがあることから非常に様々な努力をしていただいている。参考資料 4 の例にあるように、ヒグマの接近の巡視や日々の管理活動について努力していただいているが評価されることは全く無い。何とかこの努力を組み込んだモニタリングが考えられないかということで、今回の愛甲委員の提案になった訳である。この背景を理解、共有いただきたい。

これまでの説明に関する質問、コメントを含めて議論いただきたい。ワーキングの先生方も自由に発言願う。

小林委員

参考資料 3 について質問する。評価の欄に「利用が環境や社会に著しい影響を与えていないという評価（現状維持）をする。」と書いてある。対応する評価項目は「Ⅶ. レクリエーション利用等の人為的活動と自然環境保全が両立されていること。」であり、「社会」はどういう位置付けで書かれているのかを説明願う。

敷田座長

指摘の通りである。私はこの部分をコミュニティと曖昧に考えてきた。しかし、評価項目が自然環境と限定されており、そういう面からは表現が不適切であったため改めたい。

小林委員

承知した。

敷田座長

海域 WG のモニタリングでは、「地域社会の経済や社会に対するインパクト」という項目が入っていたと思う。海域 WG で社会経済データを取っているか。

事務局　環境省　守

海域 WG ではデータを取っている。海域 WG の議論では、漁業関連の部分は海域 WG で担当することとして、それ以外は科学委員会本会にお願いする方向となった。

敷田座長

この「社会」という文言を削除するかは今判断できる内容だと思うがどうか。

愛甲委員

長期モニタリング項目に科学委員会が担当する「年次報告書の作成による社会環境の把握」というものがある。評価項目の「Ⅶ. レクリエーション利用等の人為的活動と自然環境保全が両立されていること。」に対応する部分は、科学委員会で評価していたのであったか。

事務局　環境省　守

評価することにはなっているが、現状では社会環境に関する明確な評価基準がなく、科学委員会全体として各モニタリングを総括して結論を出すということはしていない。

愛甲委員

参考資料２（知床世界自然遺産地域長期モニタリング計画 別表 2）の「Ⅶ. レクリエーション利用等の人為的活動と自然環境保全が両立されていること。」にある「㉕年次報告書作成等による社会環境の把握」と「⑲利用実態調査」が混同されている。

現状の評価では「社会」という言葉が出てきているが、今後の改定に向けてどういう扱いにするか議論するべき。社会経済的な部分や観光業等も含めた評価をするのかについても議論するべきではないか。

小林委員

両立という概念において、「利用による影響」に対する環境の作り方は「㉕年次報告書作成等による社会環境の把握」ではなく、サスティナブルソサエティーの問題である。

両立という概念の中に、2 つとも包含して評価項目を作るのか、自然環境との中でサスティナブルを問題にするのか。評価軸もベクトルも全く違うため、これを一緒にしてしまうのは無謀ではないか。対象が違うため、はっきりと分ける必要がある。包含するのであれば最初から両立という概念を明確に入れておく必要がある。

エゾシカ・ヒグマ WG においても同様である。サスティナブルなソサエティーを作る上では「レクリエーション利用等が両立されていること。」と「観光、基盤となる社会、観光産業が両立できること。」ということがある。それが評価項目に入っていれば良いが、そこまでの議論はまだしていない。私は「社会」入れていて悪いと言っているのではない。入れるのであればそういう議論をするべきで、両立という言葉の持っている意味を定義しなければ議論は始まらない。

敷田座長

参考資料２（p1）のとおり、評価項目は８つあり、「Ⅶ レクリエーション利用等の人為的活動と自然環境保全が両立されていること。」という文章の中には「社会」という言葉は入

っていない。これまでの意見から、自然環境だけに限定して進めても良いようには思うがどうか。管理者側の皆様はどうか。

事務局　環境省　安田所長

平成 29 年度の評価については、環境への影響に的を絞って書いた方がすっきりする。今後のことについて議論いただければ良い。

敷田座長

他の方はどうか。斜里町、羅臼町の皆様どうか。

参考資料 3 の「対応する評価項目 」は、参考資料 2（p1）の評価項目のⅦからきている。

しかし、参考資料 3 の「評価」の文章中では「利用が環境や社会に著しい影響を与えていないという評価（現状維持）をする。」となっており、矛盾があるのではないかという小林委員からの指摘であった。

愛甲委員、小林委員の意見や安田所長の発言を反映すると、自然環境だけに限って良いのではないかということである。

「社会」はモニタリング項目として入っているが、それが科学委員会の範疇に入ることは参考資料 2 で整理されている。もう一度海域 WG で収集したデータを整理していただければ解決すると思う。自然環境に限定するという事で如何か。宜しいか。

斜里町　増田

「社会」という部分は海域 WG でも議論されてきたと思う。最終的には今後どこで扱うのかを決めなければいけない。各 WG で議論が行われているが、本来は科学委員会でその部分の整理がされるべきなのではないか。要素としては「社会」の部分も入っていたため、どこでどう扱うのかを最終的に整理する必要があるのではないか。

愛甲委員

増田委員とほぼ同じ主旨である。参考資料 2 別表 2 にあるように、長期モニタリング計画の評価項目Ⅶには社会状況に関連する事項がモニタリング項目として入っている。しかし、対応する評価項目は「人為的活動と自然環境保全が両立されていること。」になっている。

評価項目の選定根拠は参考資料 2（別表 1「評価項目と選定理由」）に書いてあるが、「原生的な自然環境の保全と、地域の主要な産業である観光を始めとするレクリエーション利用との両立を図る。」であり、参考資料 5（知床世界自然遺産地域管理計画 p10） 4.管理の基本方針にも書かれていることから、社会環境に関する事も調査することになっている。

ここでは科学委員会で評価することになっているが、全体的な枠組みの議論が必要だと思う。科学委員会での動きが分からなければ、これをどう扱うかは決められない。

敷田座長

これまでの意見をまとめる。エコツーリズム WG ではいわゆる「社会」部分は扱わない。科学委員会で確認の上、社会データをどのように調査項目の中で整理するかは今後考える。科学委員会での相談と決定が必要である。

私個人としては、科学委員会のメンバーでもありながら気付かずにいて大変申し訳ない。確かに矛盾が生じている。今後は社会データをどこで取り扱うかについては決定することを前提に、エコツーリズム WG では自然環境に対するインパクトをモニタリングするという事に限定して良いと思うが。安田所長如何か。（安田所長：はい。）林野庁は如何か。（林野庁：はい。）

主に環境省のモニタリングデータになるが、最終的には科学委員会で調整していただく。社会データは既に科学委員会でモニタリングすることに決まっているが、その範囲を明確にしていただく。エコツーリズム WG では参考資料 4 にあるように、「管理」、「利用」、「影響」についてモニタリングする。社会データのモニタリングは当面考えないこととする。

社会に関するデータは非常に多岐に渡り、公園利用のみが社会に変動を与えているわけではない。その点やモニタリングコストを考えると厳しいということもある。削除しても構わないと思う。小林委員はそれで宜しいか。（小林委員：はい。）

間野委員

「社会」についてのモニタリングは現状では対象とせず、現時点では科学委員会で整理するということで良い。しかし、管理に掛かるコストや発生した問題による地域社会へのマイナス、混乱を収拾するためのコスト等が地域を苦しめているという実情がある。

知床世界自然遺産地域管理計画に基づいて様々な仕事を進めていると思うが、現状に合わない、齟齬をきたしていることがあるのではないか。

現段階ではエコツーリズム WG が「社会」について取り扱うかどうかは決められないことであると思う。私から問題提起をするという意味でヒグマについて発言する。ヒグマとの軋轢を減らすという目標を掲げて様々な管理活動が行われている。それに伴う手立てや体制の負担は、見過ごせ無いレベルまできていると私は理解している。

例えば、次の長期モニタリング計画で「社会」をモニタリング対象とするべきだというような事を、エコツーリズム WG から問題提起することも必要なのではないか。

但し、科学委員会へただ提起しても、またエコツーリズム WG で検討するように戻されるだけで、話が進まないかもしれないが。

敷田座長

間野委員より「社会」について、特に管理コストの問題を含めた内容に関わるモニタリングが必要なのではないかという意見が出た。

それは科学委員会での議論の際に、こちらの審議結果として提示して宜しいか。

間野委員

私はそういう形で見ていくことが必要だと思う。絵に描いた餅を眺めているだけではなく、次のステップとして「見える化」していくことが重要である。

自然環境も持続的に利用されるべきだが、それを維持管理する我々の仕組みやリソースも持続的なものを目指していくべきである。その時に何処で平衡状態に保つことができるのか。また、実施不可能なことを求めても、やがて何処かで破綻する。可能な範囲で実現するということが重要である。過大な期待を抱いている人や初めからできないと思っている人が、同床異夢の状態でいることは話を先送りにすることになり良くないのではないか。勝手な発言をしているかもしれないが、そのように感じている。

敷田座長

先程の決定に付記して科学委員会へ管理コストの問題を提起していただきたい。最終的にどうするのかを明確にしていただくよう専門家の意見として考慮いただきたい。（安田所長：はい。）安田所長ありがとうございます。

参考資料 3 の「評価」に書かれた「社会」というのは、この段階ではぼんやりと地域社会を想定していたと思う。この問題も科学委員会でクリアにしていただいた方が良い。

間野委員の発言のように、エコツーリズム WG で検討するように戻されて議論が行ったり来たりする可能性がある。この 2 点について科学委員会の審議前に整理していただきたいというのが専門家からの意見である。小林委員はそれで宜しいか。

小林委員

資料 1-1 の 4 ページに「イメージ図：モニタリング体制案」というのがある。ここの評価基準に「利益還元型のエコツアーがあるか」という表現がある。間野委員の意見に関連すると思うが、誰に何を還元するのか。当然このような議論が出てくるだろうと思う。この評価基準に書かれている利益還元型と称される部分を詰めていけば、間野委員の意見は議論の過程にあると理解している。

また、「社会」について言えば、ここではローカルコミュニティを指していると思う。ソサエティーの事であるのか言葉を切り分けた方が良い。

「社会」という言葉で一括りすると議論が混乱するのではないかという印象を持った。

敷田座長

小林委員の発言も含めて科学委員会での議論を進めていただきたい。事務局、管理者側の皆様どうか。それで宜しいか。

最後の議論については、間野委員と小林委員に直接やり取りをしていただき、最終的にメ

ーリングリストで共有していただければ良い。
　それでは以上で小林委員からいただいた意見についての議論を終了する。
　モニタリングについてもう一度説明いただきたい。今後のモニタリングについて、エコツーリズム WG 担当の部分をどう行うかの議論を行いたい。

事務局　環境省　守
　長期モニタリング計画に基づくモニタリング項目の評価（改定イメージ）について説明（資料 1-2）

敷田座長
　説明に関して質問はあるか。

斜里町　増田
　説明の中で疑問に思ったことがある。知床エコツーリズム戦略に基づく新規の提案は、基本的に戦略に基づいている。それ以外の利用に関しては、計測不可能であるから対象外にするという話である。知床エコツーリズム戦略への適合状況を評価する上で、戦略以外の利用は母数が分からないのでは評価にならないと思う。
　知床エコツーリズム戦略の将来目標はあくまでも将来の目標であり、それに到達するための具体的な方策というのは、この知床エコツーリズム戦略の 7 ページに書かれている「利用コントロール」や「守るべきルールの設定と指導」、「情報の発信」、「ガイドの育成とガイド利用の推進」、「文化的資産等の活用」等である。将来目標に至るまでの当面の具体的方策として示されている。知床エコツーリズム戦略が機能して、目標へ向かっているかという意味では、この部分がきちんと評価されるような設定をしなければモニタリングにはならないのではないかと思う。

敷田座長
　増田氏から提起いただいた内容は重要であり、守氏から回答するというよりも WG の専門家の意見を聞いた上で議論したい。増田氏宜しいか。（斜里町 増田：はい。）
　それでは、このプランを考えた愛甲委員よりスタートして他の専門家の意見を聞く。

愛甲委員
　増田氏の意見と全く同じことを考えていた。事前に環境省と話をしていてアイデアを出していた段階で思っていたことがある。一つは、利用の数値の把握については大きな動きだけでなく具体的に決めておく必要がある。どういう場合に把握すれば良いのか判断するのは難しい。
　もう一つ、私の当初の考えでは、「管理」は知床エコツーリズム戦略を使って提案された

もの以外のものも評価の対象にすると考えていた。この資料 1-1 の案では、知床エコツーリズム戦略に基づいて提案され承認されたツアー利用（ツアー）となっており、私が考えていたものとはかなり食い違いがある。

母数の問題は確かにある。しかし、従来から行われている利用や提案されていないものに対して何も言えなくなってしまうというのは問題である。

これでは提案されたツアーの評価だけをモニタリングしており、遺産地域全体として適正な利用が行われているかどうかという評価にはならないと思う。

知床エコツーリズム戦略の基本方針では、具体的に数値化できるような、基準にできるような文言は書かれていない。基本方針を受けて将来目標が書かれおり、将来目標の大項目は基本原則の 3 つの項目で構成され、それぞれに具体的な数値に関わる文言があるため、これが一つの基準になるのではないか。将来目標そのものというよりも、まずは基本方針に則り評価すべきである。評価の対象については、私が事前に守氏へ発言した内容と少し解離があることから、本日議論の必要があると思っていた。

敷田座長

二人の意見は、知床エコツーリズム戦略の範疇ではなく、ひとつ上の知床世界自然遺産地域管理計画のレベルになると思う。自然遺産地域の範囲をモニタリングすべきでないかという意見だが、他の専門家の皆さんの意見はどうか。

間野委員

私の意見も増田氏、愛甲委員の意見と同様である。

先程の説明で全数の把握が困難だという話があった。知床エコツーリズム戦略で提案されたもの以外の利用の把握は確かに困難だと思う。しかし、例えば知床エコツーリズム戦略に基づいたもの以外の一般的な活動において、結果的に知床エコツーリズム戦略で目指している基本方針や原則を侵すような結果に至った行動は様々な形で顕在化している。

例えば、ゴミを捨てるというような行為は度々問題になっている。知床エコツーリズム戦略の考えに則った活動であれば、問題にならないはずである。そうすると、いくら知床エコツーリズム戦略で定義した活動が増加したところで、そうでないものが野放しなっているという状況では、結果的にゴミを捨てるという行為も無くならない。このことを認識することは、とても重要である。

私はモニタリングすることは可能だと考える。全数を把握する必要はない。それによって起きてしまった不適切な結果や知床エコツーリズム戦略に背くような利用の顛末は、必ず社会的に問題化するはずである。そういうものを指標化して、増えているのか減っているのか。いくらでもアイデアはあると思う。

中川委員

具体的にはヒグマや釣り等に関わる様々な問題がある。単に利用数だけではなく利用の質や行動での定性的な表現はたくさん出されている。数値化する等の定量的な指標も必要だとは思うが、それだけでは無く定性的な行動の変化を評価するということがとても重要だと思う。指標の中に重きを置いて入れる必要があると思う。

敷田座長

中川委員の意見は、利用の測定データは人数という定量的なものだけではなく、定性的なものを取り扱うべきだということである。

小林委員

整理ができなくて困っている。

知床エコツーリズム戦略の将来目標は 6 つの項目が既に定められている。それについては議論する必要はなく、それ以降から議論が始まるという理解で良いか。

確かに算定しづらいものがあることも事実であり、知床エコツーリズム戦略に適合しないものをできるだけ減らしていくことも分野に含まれていると理解している。

しかし、知床エコツーリズム戦略というものが、どれだけ社会に浸透して支持されているかという事も重要な観点ではないかと思う。

知床で行っている事に対して本当に支持者が増えているのか。ここで言う利用者のリピート、満足度とは違う観点かもしれない。将来的、持続的にやって行くためには、知床のエコツアーや知床エコツーリズム戦略を「これは素晴らしい」と実際のツアー参加者に言っていただく事を増やしていくこと。これも知床エコツーリズム戦略の目標の一つではないかという気がしている。

敷田座長

座長としてではなく専門家、WG メンバーとして私の個人的な意見を発言させていただく。

参考資料 4 で提案させていただいた新しい考え方は、「管理」、「利用」、「影響」の 3 つの要素をモニタリングするというところに特徴がある。例えば、「利用」は私達自身がマラソンで体を使ったとする。そうすると疲れが出るため血液や様々な要素を測ることで「影響」の部分が分かるだろう。極めて自然科学的に測定することができる。「利用」は、マラソンを走るなど強い運動したというようなこと。「管理」は「影響」を和らげるためにどれだけ努力したか、計画的な運動をしたかということ。この 3 つを独立して測ろうという考え方からきている。

その点から言うと、「利用」については取りあえず現状の人数データで測っていく。例えると、どれだけ腹筋をしたか、どれだけジョギングしたか、今日どう体を利用したかという事になると思う。

「管理」は食事に気を使ったか、運動後にストレッチをしたかといった部分になる。

知床エコツーリズム戦略だけというよりも知床世界自然遺産地域管理計画に従っていけば良いのではないかと思う。知床世界自然遺産地域管理計画に従うということは、参考資料2の評価項目で言うと、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲがクリアであると思う。Ⅱでは海洋生態系と陸上生態系の相互関係が維持されるための管理をどれだけ行ったかということになる。しかし、それは非常に範疇が広いため恐らく利用に関する管理ということになる。ある程度のコントロールはできると思う。

私の考えは、エコツーリズムWG担当の「管理」の評価指標（資料1-1、p4）は、知床エコツーリズム戦略に基づくのではなく、知床世界自然遺産管理計画の内容に基づく管理がどれだけ進められたかというものにするということ。数字で拾えるものは拾う。例えば、ヒグマ対策等はそれに該当するためそれを記述する。「利用」については当面現状の人数カウントを維持する。

この人数カウントというのは将来的には様々なIT、ICTの発達でモニタリングが可能になると考えられており、当面ということで結構である。

「影響」については、エコツーリズムWGではなく他のWGがモニタリングした自然環境データを利用するというように分けるのが妥当と考えている。議論があればお願いする。

斜里町　増田

資料を事前に送付していただいたが、資料の関係性が分からなかった。

敷田座長から説明いただいた参考資料 4。それと事務局案として資料 1-2 で示されたもの。参考資料4の提案に基づいて事務局評価案を出したということでは無いようだ。内容に大きな差がある。

事務局　環境省　守

資料1-2は、全て参考資料4に基づいたというものではない。敷田座長、愛甲委員に考え方として出していただいて、科学委員会からもこの適用について議論するように言われていた。その考え方に基づいて「影響」の部分は他のWGにお願いし、「管理」の部分は評価できる部分を評価していこうと作ったものである。内容は完全に一致してはいない。

斜里町　増田

資料1-2では、評価項目を評価する上で、4件中1件というような記述になっているが、これでは評価はできていないと思う。参考資料 4 で示されているような形とはかなり解離している。

私だけではなく事前に見た庁舎内での意見も含めて、4件ではモニタリングにならないのではないかという意見がかなりあった。そのため確認させていただいた。

敷田座長

増田氏からの意見は資料 1-2 の内容についての言及である。

現状では参考資料 3 にある内容で科学委員会に説明をしている。参考資料 1-2 では今後こうしたいという内容である。

愛甲委員と私から参考資料 4 の新しいモニタリングの考え方を提案した。それを反映した考え方として資料 1-1 があるとお考えいただきたい。複雑だが流れはそうである。

資料 1-2 は決定稿ではない。この内容をどうするのかというのは、本日の WG で専門家の意見を聞き、最終的な決定は事務局、管理者側となる。そこまで本日到達できれば良い。安田所長それで良いか。（はい。）

事務局　環境省　安田所長

知床世界自然遺産地域管理計画から絞り、知床エコツーリズム戦略に落として、より具体的に評価をするためにかなり絞った内容にしてきた。絞り過ぎだという意見もあると思う。そこは議論していただいて結構である。

一方で、これまで長期モニタリングでは評価ができないものが多かったということを踏まえて、より具体的に評価できるものということに重点を置いて考えてきた。評価をどのように行っていくかという事も一緒に考えていかなければ難しいと実感している。

愛甲委員

知床エコツーリズム戦略が対象にしているのは何かを一度確認しておきたい。知床エコツーリズム戦略（p5）に記載されている「戦略の対象」は、遺産地域とその周辺地域も含めて行われる観光利用全体である。そのため、提案制度により提案し承認されたツアーだけが対象ではない。そこが大きな違いである。具体的に言うと知床五湖やフレペの滝等が評価できないことになる。知床五湖やフレペの滝で行われている事が、知床エコツーリズム戦略の範囲内で行われているかを評価できなくなってしまう。

参考資料 4 を科学委員会に提案させていただいた時点ではそういう事は考えていなかった。全体的にそれ以外の利用も含めて考えなくてはいけないと思っていた。

しかし、それには難しい問題があると思っていた。定量的な評価ができるかということ。私は、守氏と打ち合わせした際に、特定の利用に対してエコツーリズム検討会議で異論を唱える人がいないかどうかも一つの指標になるのではないかと言った。

また、例えば、定性的な評価にならざるを得ないようなものについて、委員の何％がＯＫだと言っているというようなやり方で定量化することもできる。しかし、それは少々難しいかもしれない。

評価を難しくしている部分には、このモニタリングをエコツーリズム WG で行うのか、エコツーリズム検討会議で行うのか、それも関係していると思っている。エコツーリズム検討会議にはツアー等の実施者が含まれており、客観的に冷静な判断はできないと思う。極端に言うと「我々のやっている事に何の文句があるんだ。」という話になりかねない。

他の WG では WG だけで評価を行っているが、エコツーリズム WG だけはエコツーリズム検討会議で議論している。本当にそれで良いのか。知床エコツーリズム戦略に基づかずに現状で他に行われているような観光事業が、基本方針に則っているのか怪しいというような話はできない。現在のエコツーリズム検討会議では話しづらいという事もあるため、それも含めて整理するべきだと改めて思った。

敷田座長

愛甲委員より 2 つの話があった。前段は先程からの議論について。もう一つはモニタリング結果を検討する場がエコツーリズム WG であるべきで、エコツーリズム検討会議では利害関係者が入っているので難しいという指摘であった。

性質が違う話だが、後者の意見について先に話をしたい。私も賛成である。エコツーリズム WG がこうして開催できるようになった状態では、この場でモニタリングについて議論を行い、ここで合意された内容を事務局が最終決定する。そして、エコツーリズム検討会議に示して議論するというプロセスが必要なのではないか。安田所長如何か。

安田所長

他の WG でもその方法で行っており、私も客観的に評価するためには WG で行うべきだと思う。

敷田座長

愛甲委員、他の委員も含めてコメントはあるか。無ければこの案件について決定したい。今後モニタリングについてはエコツーリズム WG で議論し、最終案は事務局で取りまとめてエコツーリズム検討会議に報告する。エコツーリズム検討会議では必要な部分について議論していただくという流れにしたい。

前段の話に戻す。愛甲委員の発言にあった定性的な部分のモニタリングについて。モニタリングで対象にするのは、知床エコツーリズム戦略が対象としている観光全般という問題がある。もう一度原点に戻ると、これまでのモニタリングは基本的に「利用」とその「影響」を把握してきた。「利用」は利用者数でカウントしてきた。「影響」については自然科学系の WG で見てきたが、その上に「管理」を入れようという発想が根本的にある。私は、モニタリング手法にこの考え方を書いて良いのではないかと思う。

資料 1-2 のモニタリング手法には「知床エコツーリズム戦略に基づいた利用状況の把握」と書いてあるが、「対応する評価項目」の保全が両立するためには「利用」の強度だけでなく「管理」が効果的に働くことで「影響」は少なくなるはずであり、「利用」と「管理」を同時にモニタリングする。更にその結果である「影響」の部分は、他の WG による自然環境の変動の結果に任せるという整理にしてモニタリング手法を明確化しても良いのではないか。管理者側の皆様は如何か。専門家の意見はどうか。

小林委員

今の敷田座長の発言は良く理解できる。しかし、図を見ると分からなくなる。恐らくこの図でいう「環境」に対する「影響」は利用者側の量的なものであり、量的質的なものは管理者側でコントロールできる対象である。一方で利用者側が環境に与えた「影響」をミティゲーションするのもマネージメントである。すなわち、環境のマネージメントとビジターのマネージメントの 2 つの矢印が管理側から出てこなければいけない。敷田座長の表現とこの図はマッチングしていない。

この図の緑の矢印は管理者側が調整することから、利用の量や質という利用者そのものへコントロールする場合もあるし、場合によっては場の管理を行うことが効果的な場合もある。それらの 2 つをきちんと分けて書くのがよい。

管理の方法がメソッドとしてより効果的で妥当なものかという事は、第三者が評価するのではないか。管理側が利用者側にコントロールかけるべきなのか？ここは場の管理をコントロールした方がもっと効率的なのか？その評価を誰かが行わねばならない。この図では、その点が切り分けられておらず、適切に表現された方が良い。また、「影響」はあくまでも、結果としての表出であり、それに対する評価は、管理者側にフィードバックするはずである。矢印は点で書かれていてもその関係性が分かるようにして、誰が何を評価するのかという事も明確にしておかなければ分かりにくいのではないだろうか。

敷田座長

私の説明に矛盾があるのかもしれないが、これまでは「利用」しかモニタリングしてこなかったというところまでは皆さんの合意ができていると思う。その内容は数のカウントで量的なものである。定性的なものは対象にしてこなかったという問題は一つある。「影響」に対応する部分は他の WG でモニタリングをしているということも合意ができていると思う。

今回新たに入るのは、その緩和、調整をしているのが「管理」であるということである。そのため「管理」をモニタリング対象に入れたいということを科学委員会にメッセージとして出せば良いと思う。「管理」は利用に関する「管理」の部分である。

愛甲委員

「管理」という言葉が先程より気になっている。小林委員の発言にミティゲーションという言葉が出ていたが、実際に評価する対象は、地域の観光で行われている事や様々な取り組み、エコツアー自体となる。それを全て「管理」と言ってしまって良いのか。一般的な「管理」という言葉は行政が行うものという印象がある。知床エコツーリズム戦略に基づいた行政の管理ができているのかだけを評価するのであれば「管理」でも良いかも知れない。しかし、事業者が知床エコツーリズム戦略に基づいて観光の事業を行っているということを評価の対象にするのであれば、「取り組み」というような言葉でも良いのではないか。

各地域の事業者、行政も含めた構成員が、「知床エコツーリズム戦略に基づいてきちんとやっている」という評価をすれば良いのではないか。皆さんの意見を聞きたい。「管理」と言ってしまうと関係機関がやる事というような解釈にならないか。知床エコツーリズム戦略でも地域の方々も含めた構成員みんなで、こういう方針で目標を目指していきましょうねという事を言っており、それに基づいてきちんとやっているという事を評価すれば良いのではないか。「管理と取り組み」等に言葉を変えても良いのではないか。

小林委員

今の話はマネージメントで包含して行っているはずである。地域主体型の環境管理はCVMという言葉で認知されている。愛甲委員の意見は明らかにマネージメントに入っているため、オペレーションを分けてしまうと、むしろ混乱を招くのではないか。

むしろ「管理」という概念を広く捉えて行きながら議論した方が良いのではないか。

敷田座長

愛甲委員、小林委員の意見は理解できる。参考資料4にある「管理」は管理者側の管理である。知床エコツーリズム戦略のように主体で自主的な管理となっている部分についても、可能であれば「管理」の一部に含めても良いと思う。これだけ努力をしているという事を示すことができれば良い。

元々の仕組みがIUCNからのリクエストである以上、最終的には国際的に通じるような説明ができた方が良い。具体的にこれだけの努力をしている。一方、利用はこれだけある。自然環境はこのように変容しているという事を説明できれば良いと思う。

安田所長

最初に科学委員会で提案いただいた際には、「そもそも「利用」は評価できないでしょう」という意見と「知床では知床エコツーリズム戦略があり、戦略に基づいた提案制度がある。そのような枠組み自体が評価の対象になるのではないか」という意見があったと私は理解している。

提案されたものだけではなく、知床エコツーリズム戦略に基づいた様々なツアーがどのように行われているのかという事が、評価の対象になってくると理解している。

中川委員

私も愛甲委員の意見に同感である。これまでのモニタリングは受益者側の動きや数を評価してきた。サービスを提供する側は、管理者と事業者を一緒にして初めて受益者の行動や数につながる。サービスは受益者の様々な行動を規制するので、それを評価することで間接的に評価しているのかも知れない。確かにこちら側の評価が無ければ少し歪んだものになるのかという気はした。

敷田座長

時間の関係があるためここで一度まとめたい。

これまでの意見から新しいモニタリングの枠組みを提案する事については基本的に合意ができていると考えたい。そこまでは宜しいか。

その内容は、これまで「利用」、参考資料 4 でいうと利用強度でその部分を見てきた。このエコツーリズム WG のモニタリング体制を、愛甲委員の言葉で言えば「管理と自主的な取り組み」まで範疇を広げて可能な限り評価をする。

これは知床エコツーリズム戦略が想定している範囲であり、知床世界自然遺産地域管理計画にも書かれている範囲で可能な限りの評価をする。

この評価は数字的なものを出すのはかなり厳しいが、例えば知床財団が努力している内容等、努力した実績もできるだけ入れた記述にする。利用強度については当面の間、人数の管理が主となる。技術開発を待って定性的な管理も考慮する。「影響」については他の WG で受けた「影響」についてのデータを蓄積していただき整理する。以上を踏まえて事務局側で最終案を考えて提示いただくのが良いと思う。

愛甲委員

これまでの話題と違う「影響」に関する部分について発言する。

科学委員会では実際にどのように評価するのだろうと考えていた。こちらからは「こういうエコツアーを知床エコツーリズム戦略に基づいてきちんとやっていますよ。」、「利用者数はこの程度で推移していますよ。」というデータを出して、あとは科学委員会でやってくださいねというような事をここで決めてしまって良いのか。

例えば、猛禽やヒグマについて他の WG から様々な情報が上がってきて、それを組み合わせて科学委員会でどのように評価するのだろうか。自分でやらなければならないと仮定すると、できるのだろうかと思ってしまう。少なくとも評価しやすい形で上げる必要もあるし、何かもう一工夫それぞれの WG で考える必要があるのではないかと思う。

エゾシカ・ヒグマ WG では、高山帯の踏み付けの部分はエコツーリズム WG でも評価するべきなのではないかと石川委員が発言していた。現状ではエコツーリズム WG が評価する項目にはなっていない。「影響」の部分については、具体的なイメージを持って、どういう委ね方をするのか次の機会にでも議論させていただきたい。

敷田座長

これに関して私の意見を言う。例えば、特定のサイトに何人か入ったため植生がこれだけ後退した。管理のコントロールはこうなっているという事で評価は可能だと思う。人数に変化がないのに植生が後退している場合は、管理が不十分であるという指摘ができると思う。人数が増えて管理のレベルを上げていった場合に、植生が後退していないのであれば管理

を含めてバランスが取れているという評価が出せると思う。時間差があるためクリアには出せないかもしれないが扱える範囲だと考える。
　このように付帯意見が付いたものをまとめてお預けしてよろしいか。

安田所長
　管理や取組を評価する事により影響も評価できると私は理解していた。
　影響を見るのは難しいため、しっかりと管理されていることを評価すれば良いというのは今回の大きな変化、転換であった。また、間野委員の発言にあったように、顕在化して起こっている問題によって影響を評価するというような話もあった。この部分については我々がモニタリングを行っている部分であり、出していけると思う。この 2 点で何とかカバーできないかと思っている。

敷田座長
　安田所長に整理していただいた。それをここで合意しておいて最終案を作っていただく事で話を進められるのではないか。事務局は不安な部分や付帯事項は無いか。

事務局　環境省　守
　全体的な方向性としては、敷田座長にまとめていただいた形で事務局として考えていきたい。
　愛甲委員の発言のように、具体的にどういうモニタリング項目を設定していくかについては、科学委員会との整合も取らなければいけないと思っている。しかし、その全てを一対一対応でできるわけでは無いため、他の WG からエコツーリズム WG でこういうモニタリングをして欲しいというような話が上がってきた場合は組み込む可能性もあると考えている。この基本的な考え方に沿い、愛甲委員から今後もヒアリングさせていただきながら事務局で案を詰めていきたい。

敷田座長
　管理と取り組みという事で今後も表現していきたい。「管理と取り組み」、「利用」、「影響」というように「管理と取り組み」の部分が新たにモニタリングとして入ってくるという事になる。
　今後、参考資料 3 に書いてあるような記述は、WG 委員が原案を作り、事務局と相談して案を作るという体制を取った方が良いと思う。これを事務局に依存して作ってもらうというのは非常に負担が大きいと思う。専門的な意見を入れた方が良いと思うため、専門家は承認をお願いできるか。座長がするというよりも順番に担当していただいても良いのではないかと思う。勿論、それぞれの専門分野があるため、一番近い愛甲委員、小林委員からスタートしていただき、データを見た上で事務局と相談しつつ評価内容を書いていくという体

制を取りたい。安田所長如何か。(安田所長：はい。) 最終的には科学委員会で責任を持ってモニタリング結果についてコメントを書く。専門家としての役割だと思うため承認いただければそういう体制で進めたいと思う。

小林委員

資料 1-1 (p4) の評価基準の部分を改めて見た。先程の安田所長の意見を踏まえると、ここに入れるものは知床エコツーリズム戦略の具体的方策の (1) から (8) ではないかという気がしてきた。

敷田座長

それも含めてご考慮願う。現在 11 時 30 分であり、残り 40 分程度しか時間がない。次の議事へ進みたい。長期モニタリング計画の見直しについてはこれで終了したい。

次に今後のワーキンググループを含めた検討会議の進め方について議論をしたい。

【議事２．適正利用・エコツーリズム検討会議の今後のビジョンについて】

敷田座長

この議題は私から希望して組み込んでいただいた。これまで 5 年間、知床エコツーリズム戦略に基づく議論を進めてきた。今後の進め方や目指す方向をどのように考えたら良いか意見をいただきたい。資料 2-2 平成 29 年度第 2 回エコツーリズム検討会議の参加者アンケートを皆さんに配布した。エコツーリズム WG は専門家、事務局、管理者、地元の町というメンバーが揃っているが、それを越えて今後どのような方向へ持っていったら良いかを対等に議論できると思う。資料を基調にして意見をいただきたい。

私個人としては、知床エコツーリズム戦略という物差しができて、それに従った提案制度を運用してきており、その点については成果があったと考えている。

一方で提案制度自体が持っている提案のしにくさも指摘されている。また、以前にあった話でヘリコプターの問題のようにここで扱うのは限界があるとか、提案が扱える範囲には様々な課題もある。そういう点について、意見交換をさせていただき方向性を作っていければと思っている。事務局を含めて補足があればお願いする。

事務局　環境省　守

事務局からは資料 2-2 を配布している。エコツーリズム関係の各種計画と会議の関係図、適正利用やエコツーリズムを取り巻く知床の状況についてまとめたものである。全体的な体制も含めてどのようにしていけば良いかは事務局でもまとまっていない。皆様の意見を伺いながら考えていきたい。

平成 28 年度第 2 回検討会議の際に敷田座長を含めた皆さんより提案いただき、5 年を目途に様々な見直しを行っていこうということになっている。今回は 2 年目であり、目標とし

ては 3 年後に何らかの整理ができれば良いと考えている。現時点では皆さんの意見を伺って今後考えて行くという段階である。

敷田座長

資料 2-1 アンケート結果、資料の 2-2 を見ながら発言いただきたい。エコツーリズム検討会議は地域関係者も入った会議である。皆さんの個人的な考えを含め、これまでの経験から発言いただいても構わない。委員の皆様は参加者の 1 人として意見をお願いする。

愛甲委員

資料 2-2 にある「知床エコツーリズム推進計画」と「知床エコツーリズム推進実施計画」は、現在どういう位置付けになっているのか。

事務局　環境省　守

はっきりした事は書いてないというのが現状である。エコツーリズム推進協議会自体は解散しているが、そこで作った推進計画と推進実施計画について「やめます」という話にはなってはいない。実施主体としての協議会は解散しているという状況である。

愛甲委員

今回改めて読んでみた。知床五湖に関する内容も、利用調整地区が導入されて期日が合わない部分等もあるが、知床データセンターには残っている状況である。知床データセンターに置いておいて良いのか。文章中の考え方は知床エコツーリズム戦略で大部分が拾えていると考えて良いのか、どういう扱いをすれば良いのか。

普及啓発や人材育成等、エコツーリズム推進協議会で考えて行ってきた事が、現在このエコツーリズム検討会議で発信できているのかという疑問がある。推進計画を策定した際には、三つ折り程度の小さなパンフレットを作り、「知床五湖ではこんなルールがあります。羅臼湖ではこんなルールがあります。」というような内容のものを作って配っていた。現在はそういうものは無い。例えば、知床エコツーリズム戦略で提案されて認証されたツアー等を列挙して、利用者の皆さんに情報提供するような事もできていない。何かそういうようなことを考えても良いのではないかと思う。

敷田座長の発言に、提案がしにくいというような話があったが、提案されて認証されたものに対して何かメリットを作るというような事をやらなければ、新たな提案は増えてこないのではないかと常々思っている。大したメリットにはならないかもしれないが、「科学委員会と WG の議論を経た上でモニタリングもきちんとしながら行っているツアーですよ。」というように、認めたものに対しては積極的に応援して行くという事をやっていってはどうか。

敷田座長

推進計画と推進実施計画に関して他の意見は無いか。平成 22 年度第 2 回エコツーリズム検討会議の際には、知床エコツーリズム戦略ができた場合、推進計画と推進実施計画はどうなるのかという議論がされている。その際には、知床エコツーリズム戦略ができれば推進計画と推進実施計画は廃止にするという議論で終わっている。廃止してその後どうするのかという議論までは多分していなかったと思う。

愛甲委員の発言にあった振興の部分、管理ではなく推進していく部分については新たに何か方向性を作っても良いのではないかと思う。これは専門家としての意見である。

例えば、世界遺産の中の観光振興ビジョンのようなものが作れれば良いと思う。これに関しては運輸局関係の振興部分であり役割が非常に大きくなる。運輸局で頑張っていただくと非常にありがたい。環境省は管理の担当部分が大きく、対外的に振興計画を作ることには無理がある。役割の問題である。重荷になるとは考えずに専門的見地から考えていただきたい。

北海道運輸局釧路運輸支局　山崎

本日オブザーバーで参加させていただいている北海道運輸局釧路運輸支局の山崎と申します。お世話になっております。

敷田座長の意見に回答する。本局に観光部というのがあるため話を伝えたい。その上で運輸局としてどうしていくかを検討させていただきたい。

敷田座長

一人で作れというような話ではない。リードしていただき事務局のような役割を担っていただきたい。運輸局は振興に関する情報量を圧倒的にお持ちだと思う。管理は責任、権限、情報のある担当省庁があるが、性質上やっていただけると現在手薄な部分が充実する。どのように検討するのか、例えば WG を作るというようなことや費用、運営に関しても相談したい。先の話になるが考えていただくと非常に助かる。これは私の意見だが、安田所長はどうか。環境省はするなという話ではない。勿論メンバーには入ると思う。情報量は圧倒的に運輸局が多いので積極的に参加していただいても良いと思う。

北海道運輸局釧路運輸支局　山崎

運輸局は観光振興の様々な計画を作るための情報量等は確かにあると思う。しかし、国立公園となると管理の部分と密接であり、そこをこういうメンバーで上手く作っていければ良いと感じた。運輸局が振興、振興で走るとサスティナビリティというところが壊れてしまう可能性がある。そこを上手く議論していく必要があるのかなと感じた。

敷田座長

おっしゃる通りである。ただし、今回は国立公園の計画ではなく、世界遺産のための振興計画で、そこには法律はない。その点では権限の越境にはならないと思う。是非、環境省と調整しつつやっていただきたいと言うのが私のコメントである。是非相談してほしい。現在、道庁からは自然環境担当の方のみが出席いただいているが、観光や地域振興となると観光局からもこの会議に出席して欲しい。ここで即答して欲しいという話しではない。管理の部分は現在出席いただいているメンバーに十分やっていただいているが、振興に関しては運輸局と同等に道庁の振興部分を担う観光局から来ていただくことが妥当だと思う。検討していただきたい。

北海道　杉本

現在、北海道は観光に力を入れているという事もあり、調整しながらできるだけ協力していきたい。

敷田座長

北海道の積極的参画については、環境省、林野庁はどうか。

事務局　環境省　安田所長

是非、参画いただきたい。

敷田座長

道庁は条例をお持ちであり、条例の中にもはっきりと書かれている。よろしくお願いします。愛甲委員それでよろしいか。（愛甲委員：はい。）

将来の方向性については、運輸局と道庁で振興ビジョンのようなものを考える場を作ってもらえるよう検討していただく。連絡を取って進めていただくと有難い。

推進計画と推進実施計画については廃止が妥当だと思う。今の話が進んで行く事について事務局の意見はあるか。

事務局　環境省　守

環境省でも考えており議論があった。この体制全体を見直していく中で、推進計画と推進実施計画のエッセンスがどこかに継承されていくという形が良いのではないかと思っていた。敷田座長の発言のとおり、他の計画でその部分を吸収するという話であればお願いしたい。

間野委員

運輸局の話は非常に重要だと思っている。北海道全体の観光の動線を考えた時に、道東地域の観光や北海道全体、日本全体の観光の中で知床がどのように位置付けられるか。特殊な

知床世界遺産というものをアピールしていただくという事がとても重要だと思う。世界遺産地域だけで話をするのではなく、ユーザーは北海道を訪れる一環として知床に足を運ぶ。そこでしかできない特殊な経験や知床エコツーリズム戦略に裏付けされた質の高いサービスが受けられると。その辺は売りの部分でもある。サスティナビリティというのは知床に限らず全ての観光利用に共通しており、これは国土交通省の立場であっても否定されるものではない。知床が質の高い活動を通じてユーザーの理解を深める。その事が北海道の他地域の観光地にとってもプラスになると思う。世界遺産のエコツーリズムだけを売り込むというだけでは足りないというのが現在の環境省の立場であると思う。利用と保全の調整には大変苦慮されているが、それは北海道全体でも一緒である。広域の観光利用という売り出し方で様々な知恵をいただければ良いのではないかと思う。

敷田座長

道庁と運輸局には持ち帰っていただき検討をお願いする。推進実施計画が廃止されて新しい振興ビジョンのようなものの方向性がまとめられると良い。そして部会のような形で検討できれば管理だけを推進しているようなイメージも払拭できると思う。新しい枠組みになるかと思うため是非よろしくお願いします。個人的には私からも札幌の水口氏や道庁の観光局に働きかけたい。よろしくお願いします。

斜里町　増田

本日ここで議論するという事ではなく、今後整理していただきたいことが一つある。

本日エコツーリズム WG に招集された。エコツーリズム WG 及びエコツーリズム検討会議はそれぞれ何をやるのか。モニタリングはエコツーリズム WG で行うというような話があった。地域としては混乱するため、それぞれが何を担うのかというのを明確にする作業をしていただきたい。

敷田座長

もっともなリクエストである。斜里町、羅臼町の両町は、WG メンバーや関係者でもなく、地元の利害関係者という立場で入っている。管理者の事務局側は両町をどのような位置付けで考えているのか。また、今後はエコツーリズム WG とエコツーリズム検討会議の役割分担をどうしていくのか議論したいと思う。

事務局　環境省　守

エコツーリズム WG には設置要綱があり、そこには地元自治体という事で斜里町と羅臼町にメンバーとして入っている。事務局は釧路自然環境事務所と林野庁北海道森林管理局、北海道が入っているという機構図になる。斜里町、羅臼町には構成員という位置づけできていただいていると理解している。

エコツーリズムWGは、知床エコツーリズム戦略の策定まで開催され、その後、知床エコツーリズム戦略の運用が始まった頃からはエコツーリズム検討会議が開催されてきた。エコツーリズム検討会議の内容は知床エコツーリズム戦略の提案制度の運用部分に時間が割かれており、その他の議論をする時間がないということから今回エコツーリズムWGを開催することになった。

当面はエコツーリズムWGで議論するのは長期モニタリングがメインになると思う。また、今後想定される知床世界自然遺産地域管理計画の改定等は、エコツーリズムWGにおいて議論していただき、エコツーリズム検討会議で報告するという形になると思う。

エコツーリズム検討会議のメインの議事は、これまでと同じように知床エコツーリズム戦略の提案制度の運用に時間を割いていければ良いと思っている。

敷田座長

増田氏より提案等あるか。現段階では明確に切り分けている訳ではない。今後検討するということ。

斜里町　増田

様々な考えはあるが本日は時間も無い。機構図や推進計画の件もあるが、それぞれが何をするのか一度整理してほしい。エコツーリズムWGは本日久しぶりに開催された。課題が解決したら一旦休みになるような事もあるかもしれない。何をするのかが今ひとつ分からない。長期モニタリング計画の見直しというのが一つの理由だとは思うが、切り分けが必要ではないか。

敷田座長

エコツーリズムWGとエコツーリズム検討会議の役割を、紙一枚程度で文章化しても良いと思う。例えば、モニタリングはエコツーリズムWGの検討事項とし、エコツーリズム検討会議へは報告するというような位置付けにすれば良いと思う。委員の意見はどうか。役割を分けなければ別々に行っている意味が無い。

愛甲委員

エコツーリズム検討会議では話しにくいような話題、現状行われている事に対する懸念事項や将来的な懸念等を含めてエコツーリズムWGで議論すると良いのではないか。

エコツーリズム検討会議ではとてもやりにくいと感じている。個人攻撃をしているように受け取られてしまう場合もあるかもしれない。そもそも科学委員会の役割はアドバイザーであり、エコツーリズムWGではもっとアドバイザーの色を強くした議論を行っても良いのではないか。それをどうエコツーリズム検討会議の場で伝えるかというのは様々な配慮が必要だとは思う。

敷田座長

愛甲委員の発言のとおり、話にくい内容や将来に関わる内容、観光振興ビジョンのような事はここで議論して決めて行っても良いと思う。決めるという言い方は非常に不自然だが、WG の委員からは専門分野毎に意見が述べられて最終的にはここで合意する。それを事務局が実施し、エコツーリズム検討会議に諮るというような流れで良いと思う。

安田所長、徳田次長は過去の経過を知らないため新鮮な意見をお持ちだと思う。意見を聞いて合意したいと思うが如何か。

事務局　環境省　徳田次長

エコツーリズム WG が復活したという事は、委員の手間がまた増えるという事ではあるが、具体的な事が少しずつ議論できると思う。私は午後からのエコツーリズム検討会議もまだ出席した経験は無いが、斜里町、羅臼町の両町に関わる関係者もかなり多く出席されているようである。エコツーリズム検討会議では、どうしても提案を行う事業者の細かい説明に時間が取られるという事であれば、エコツーリズム WG ではコアなメンバーで議論を行い、様々な専門性を含めて合意した上で、エコツーリズム検討会議に諮る方が良いと思う。

安田所長

この場は科学委員会の WG であり、科学的な見地で専門的な分野から議論していただきたい。コンパクトな形で議論もしやすいと思う。現在、議題となっているのは長期モニタリングだが、引き続き他の計画等の全体的なものや枠組み等については、この場で議論していただきたいと考えている。

エコツーリズム検討会議は、あくまでも知床エコツーリズム戦略に基づく各事業の状況や報告、認定という事になり、これまで通りの運営方法で良いのではないか。

敷田座長

安田所長、徳田次長の意見は共通したところもあり、別の視点もあった。しかし、非常にクリアな整理になったと思う。役割を分けて考えられると思うが増田氏はどうか。

斜里町　増田

そういう整理をしておかなければ地域が混乱する。出席するメンバーも混乱すると思うため本日確定しなくても整理しておくべきだと思う。

敷田座長

本日皆さんの合意ができて次回も開催するという事であれば、そのまま文章化していただいて良いと思う。長期モニタリングの決定は最終的には管理者、事務局となるが、内容に

よっては合意もできるというように書いていただく方が良いと思う。それでなければただの意見交換会になってしまう。我々のような科学委員会の専門家アドバイザリーボードとしての性格を持ったメンバーと管理者、振興に関するところではオブザーバーというよりもかなり主体に近い運輸局と道庁に入っていただく。斜里町、羅臼町の両町については、地域代表、地域事情の説明ができるという事で WG メンバーに位置付けられれば良いと思う。羅臼町の遠嶋氏はどうか。（羅臼町 遠嶋：はい。）

地域の部分は、利害を代表するという意味が含まれてしまうが、地域事情に詳しい両町が代表で入るということで整理できるのではないかと思う。事務局側で整理をしていただき、次回よりそれに従い議論するという事でお願いしたいと思う。

今の議題や将来の進め方、具体的な内容について意見はあるか。

中川委員

アンケートの資料についてお聞きしたい。これはエコツーリズム検討会議にも資料として出すのか。また、質問番号が飛び飛びになっているが、これは抽出版なのか。

敷田座長

これは私が作っており暫定版で申し訳ない。

事務局　環境省　守

現時点ではエコツーリズム検討会議の分は用意していない。

敷田座長

ここで決めれば出せると思う。

中川委員

質問のその他にある具体的な記載にはどんなものがあったのかを教えて欲しい。

敷田座長

アンケート結果を印刷し忘れていた。午後からのエコツーリズム検討会議に出す時は、それを含めて印刷する。例えば、「座長が発言させてくれなかった時」という質問についての回答を書いてある。整理済みであり皆さんが良ければ結果を暫定版として出して良い。正式版はまた改めて出す事になると思う。

エコツーリズム検討会議は非常に大規模で、会議後の振り返りという意味で内容は毎回変更している。皆さんのフリーコメントを書けるようになっている。ただし、議事や結果に影響を与えたりしないという説明で、最後に振り返りアンケートのようなものを本日も実施しようと思っている。この点について皆さんの了解をいただければするという事にした

いと思う。如何か。内容はメーリングリストに出したものと変えてはいない。番号の修正を指摘いただき直した程度である。内容を少し変更し、フリーに書く欄が増えている。本日はそれを使用して実施したい。

小林委員

話しを戻して申し訳ない。先程のエコツーリズム推進計画についての議論である。普及啓発人材育成プログラム開発は一通り終わったという理解でいる。しかし、一方で世界遺産地域を抱えている公園は沢山あり、それぞれに様々なエコツーリズムが展開されているという状況がある。そこで運輸局にお願いがある。地域のエコツーリズムを作る力を育てるNPOの全国組織がある。プログラムを作る上では各地で行われている様々な工夫や対応策を、そういう人達との情報交換をすることで、エコツアーを提案される側の提案力を高めるような仕組みを是非検討いただきたい。

敷田座長

非常に重要な点だと思う。是非よろしくお願いします。

羅臼町　遠嶋

資料2-2について質問する。この資料はエコツーリズムWGがあり、エコツーリズム検討会議はそのままだという確認の資料だったのか。

事務局　環境省　守

この資料は今後体制を見直すために現状の整理で作ってあるものである。これで何か提案するとかではなく、これを基に議論していただくために作った資料である。

敷田座長

この場での合意、位置付けはエコツーリズム検討会議とは違ったものになる。エコツーリズム検討会議で議論するのが難しい議論をここで自由にできるようにする。斜里町、羅臼町の両町は地域関係者代表として参画していただく。WGはこれまで通り科学委員会の一部として機能する。管理者が入っていただく。オブザーバーとなっている運輸局は、次回から正式メンバーとして入っていただきたい。そして道庁観光局がメンバーとなっていただきたい。自由に発言していただいて結構である。安田所長、今のようなまとめで良いか。

安田所長

運輸局に相談させていただきたい。

敷田座長

あくまでもWGメンバーへの合意という事でお願いする。
それでは5年振りに復活したエコツーリズムWG会議を閉会する。

【議事３．その他】

事務局　環境省　守

番号は付いていないが参考資料 7 について説明する。これは小林委員より提供いただいた記事である。ご覧いただきたい。

小林委員

モーリーに掲載した記事をご案内した。

敷田座長

皆さんで共有していただいた方が良い資料は、WG 委員を含めて斜里町、羅臼町からも今後は出して欲しい。WGの場で出すのが適当だと思う。よろしくお願いします。

事務局　環境省　高辻

敷田座長議事進行及び取りまとめをありがとうございました。

平成 30 年度第 1 回知床世界自然遺産地域科学委員会適正利用エコツーリズム WG を閉会させていただく。ありがとうございました。

（閉会）